

# 『心学早染草』善玉悪玉の影響

——明治期——

関原 彩

〔キーワード…①山東京伝 ②心学早染草 ③善玉悪玉 ④浮世絵 ⑤明治〕

はじめに

善玉悪玉とは、寛政二年（一七九〇）刊の山東京伝作の黄表紙『心学早染草』から生まれたキャラクターで、刊行以来様々な影響作品が作られた。本稿は、拙稿『心学早染草』善玉悪玉の影響―寛政から文化・文政まで―／―天保から幕末まで―<sup>〔1〕</sup>の続稿として、明治期を取り上げる。

なお、善玉悪玉の影響例を集めるにあたって、そのキャラクター像は、①頭部が丸で描かれていること、②丸の中には文字が書かれていること、③着衣の有無や種類は問わないこと、とする。

第一章 浮世絵

浮世絵では、善い行いと悪い行いを上下に二等分した枠の中に描き、対比させている作品が出された。昇斎一景は明治三年（一八七〇）に「娘教訓二面鏡」というシリーズを出している。画面上側が悪、下側が善で、娘が成長していく過程を善玉悪玉と共に描いており、十二作品二十四図から成る<sup>(2)</sup>。善悪それぞれ一から十二までの番号がふられている。善を番号順に見てみると、手習いに励む場面に始まり、習い事や親の手伝いを熱心にする娘には、良き伴侶と結ばれて子を授かり、円満な家庭を築くという物語になっている。一方悪の図では、手習いや習い事もせずに遊んでばかりいて、親の決めた相手にも不満を持ち、駆け落ちをしてしまう。しかし男に捨てられ遊女となるが、客との間に子どもが生まれてもやがて捨てられてしまい、乞食のように落ちぶれてしまうという人生を描いている。それぞれの行いを善悪に描き分けており、娘への教訓がわかりやすく描かれている。画面の中では、善玉は行いの良い娘を見守っているが、悪玉は悪い行いをさせようと唆している。善玉悪玉は、江戸時代によく描かれた禪一丁の姿ではなく、悪玉は黒い股引に赤い長袖、善玉は薄い水色の股引と長袖を着ており、肌の露出が抑えられている。

翌年の明治四年に出された「教訓善悪鏡」（一景画）は、息子を主人公として、幸せな人生と不幸な人生を送る様子を善悪で描き分けたシリーズである。「娘教訓二面鏡」同様に善玉悪玉が描かれており、上段には悪、下段に善を配し十二作品二十四図あるという<sup>(3)</sup>。善は親孝行する人力車夫の息子が、ある日女性客のもとへ忘れ物を届けに行くと、正直だと家人に気に入られ娘と結婚する。その後二人は力を合せて商売を始め、子どもにも恵まれ幸せな生活を送るという筋である。「一」では親孝行することにより、大黒様が「こ、のうちは



図1「教訓善悪鏡 善 八」  
町田市立博物館所蔵

どううやら心持ちよく住まへそうだわへ」と住み着いている。また図1の「八」では、乞食が毎日来るので、かわいそうだと思つて自分の弁当を分けてあげると、善玉がこの親切な行動を天道様に報告し、天道様は「かんしんく」と言っている。親孝行や正直で親切な行いが幸せに結び付くことがわかる。一方悪は、仕事を怠けている息子が、廓通いして遊び呆け、結婚しても威張つてばかりいるので、妻は出て行ってしまう。商売も横柄な振る舞いにより上手くないかず、乞食に身を落としてしまうという内容となっている。「一」で大黒様は早々に出て行ってしままい、「九」からは貧乏神の夫婦が憑りついている。悪玉は水色の禪に赤い長袖、善玉は赤の禪に水色の長袖を着ている。



図2 「酒人を呑む迄 七合にして心狂乱す」  
町田市立博物館所蔵

酒についての教訓を説く例も見てみよう。「教訓 酒者 無量不可礼可慎之一也」(一景画、明治五年、大判三枚続)は、画面右上段から反時計回りに酒を一合二合、と量を増やしていくにつれ、人が酒に飲まれていく様子を描いている<sup>(4)</sup>。顔に「酒」と書かれたキャラクターが画面の至る所で酒を勧めていった結果、画面右下では酒の量は一升まで増えている。酒を飲んで陽気になる様子から、飲み過ぎて具合の悪くなる様子までを示している。

「酒人を呑む迄」(一景画、明治三年)も、人が酒に呑まれる様子を描いた作品で、画面を上下二つに分け一合から一升までを描いたシリーズである<sup>(5)</sup>。例えば「二合にして肴を好む」では刺身が食べたくなり、「六合にして心獄おくり込」では遊郭に行く。図2の「七合にして心狂乱す」では芸者をあげての宴会で、禪姿の「酒」のキャラクターと共に踊る様子が描かれている。九合になると「酒人を呑む」と書かれる通り、大男が大きな盃に入った酒と共に、酒に呑まれた男を飲もうとしている。最後の「大酒は一升のどくにして病を養慎むべし」では、体を壊してしまい、妻に愛想を尽かされてしまう。



図3 「教訓言黑白 八 命のせんたく」  
町田市立博物館蔵

「教訓言黑白」（一景画、明治四年）は、諺を絵解きしたシリーズで、幸運と不運を示す諺がそれぞれ十図ずつあり、一から十までの番号が振られている<sup>6)</sup>。諺を繋いでいくことで話を展開させており、努力している男は幸運に恵まれていくが、仕事に精を出さない男は悪事に手を染めていく。その中で、顔に「天、心、福、金」

などと書かれた善玉悪玉のキャラクターが、絵で諺を示すという役割を担っている。例えば「棚からおちた牡丹もち」では、夫婦が思いがけず反物や酒をもらっている場面が描かれているが、顔に「天」と書かれた者たちが夫婦のもとへ「運」と書かれた玉を運んできている。「悪せん身につかず」では、遊郭にいる男の財布から顔に「金」と書かれたキャラクターが次々と飛び出している。これは悪事に手を染めて得たお金は残らずに出て行ってしまふ様子を表している。また、図3の「命のせんたく」で顔に「心」と書かれた者たちが「命」の字に水をかけて洗っているが、山東京伝作の黄表紙『御詠染長寿小紋』（喜多川歌麿画、享和二年（一八〇二）刊）に同じ諺を用いて「命」を洗う図が描かれている他、曲亭馬琴作『鼻下長生菜』（寛政十年刊）では「欲」のキャラクターが「命」を鉋で削っている図があり、「命」の字をモチーフとした趣向はよく見られる。



図4「教訓善悪図解」  
善教ノ小兒／悪習ナ子供  
国立国会図書館所蔵

な身分や職業の者を主題にしている。図4の「善教ノ小兒／悪習ナ子供」では、善玉がついている子はよく勉強している姿が描かれているが、悪玉がついている方は悪さをしたのか柱に縛り付けられ、母に怒られる姿が描かれ、母を止めようとする悪玉や囃し立てている悪玉が周りに描かれている。芳年は、先にあげた一景とは異なり、善玉は直衣姿、悪玉は江戸時代によく見られた赤の禪姿で描いている。

楊洲周延も『善悪両頭教訓鑑』（明治十五年）にて、上下に画面を分けて、善玉悪玉を描いている。シリーズもので、六作品確認されているという<sup>(8)</sup>。タイトルの「両頭」とある通り、頭を二つ描くことで心の迷いを表現している。

子どもを主題とした浮世絵もある。「善玉悪玉 子供の生活」（画工未詳、明治六年）は、横に三等分した

一景の「娘教訓二面鏡」や「教訓善悪鏡」に似たシリーズを月岡芳年も描いている。芳年は、明治十三年に「教訓善悪図解」というシリーズを出しており、二十一作品四十二図が確認できる<sup>(7)</sup>。このシリーズは、善悪の配置が一景の作品とは反対で、画面上側の絵では善玉がついた人、画面下側では悪玉が取りついた人というように描かれている。子どもや女房などの親族関係だけでなく、華族や俳優、僧などに至る様々



図5 「暁斎楽画第六号 獅子恋慕話」  
東京都立中央図書館特別文庫室所蔵

画面の中に、それぞれ子どもたちの遊びや生活の様子が描かれている<sup>(9)</sup>。子どももの周りにいる善玉は水色の長袖に紫の股引、悪玉は赤い長袖に水色の股引を穿いている。石を投げるようないたずらしている子には悪玉がついており、よく稼ぐ子などの善い行いの子には善玉がついている。また、同じ板元と改印を持つ、構図の異なる作品も確認でき<sup>(10)</sup>、シリーズものとして出された可能性もある。

続いて、幕末の風刺画で善玉悪玉のキャラクターを用いていた、河鍋暁斎による明治期の作品を見ていこう。「暁斎楽画」というシリーズの中には、善玉悪玉を登場させている作品がある。図5の「暁斎楽画第六号 伊蘇普物語第一之巻二十九枚目 獅子恋慕話」（明治七年）は、『伊蘇普物語』の中の、人間の娘に恋をしたライオンが、恋を叶えるための条件として、危険な爪を抜き牙を折ることをのんだが、無防備なライオンには誰も

怖がらず追い出されたという話を題材にしている<sup>(11)</sup>。紫の格子縞の着物を着た女性の足の足の上に前足を乗せているライオンだが、体を紐で縛られており、木に繋がれている。ハサミを持った男は後ろの脚の爪を切っており、隣にいる女性は毛抜きを持って尾をつかんでいる。ライオンの足元には、切られた爪が落ちていている。ライオンを騙しているかのように、後ろでは悪玉が踊っている。



図6「暁斎楽画第七号 負福出替之図」  
東京都立中央図書館特別文庫室所蔵

図6に挙げた「暁斎楽画第七号 負福出替之図」(暁斎画、明治七年)は、善玉と悪玉が糸で人間を操っている様子が描かれている。悪玉に操られて狂宴を繰り返しているうちに、金は蔵から逃げ出してしまい、恵比須や大黒も見捨てて出て行こうとしている。善玉は狂宴を憂いている人々を救い出そうとしているが、多くは悪玉によって操られている<sup>(12)</sup>。悪玉は二本の角を生やした鬼の姿、善玉は白い直衣姿で描かれている。

鬼姿の悪玉は「暁斎楽画第十号 しんぼふ」(暁斎画、明治七年)でも描かれている<sup>(13)</sup>。しんぼふと書かれた棒の上から糸が垂れ下がり、それぞれ懸命に仕事をしている人と繋がっているが、棒から離れている人は、歌ったり踊ったりと自由気ままに過ごしている。悪玉は扇子を持って踊り、辛抱して働いている人を、放蕩の道へ導こうと誘惑している。

図7の「世直山物価降図」(歌川国政画、明治十八年、大判三枚続)は、幕末の風刺画の中で取り上げた「一寸みなんしことしの新ぼん」のように、物価を題材にした作品である。世直神社を舞台として、顔に様々な商品や職業名が書かれた巡礼姿の者たちが描かれている。画面左側は山を登る人々で、物価が高騰したものが描かれているのだろう。頂上までの道のりには「大ふけい木」「しよぜい木」などがあり、「しよぜい木」には、



図7「世直山物価降図」早稲田大学図書館所蔵

薬、酒、たばこ、菓子などが登っている。頂上の「官員ヶ嶽」では、不況知らずの華族、鉄道、銀行、官員、芸者とお雇い異人が「ふもとではふけい木」と言っているがどんな木だか「此山におれば安心だ」と言っている。一方で画面右側では、そば屋を先頭に商人や職人が「小まけ道」という階段を下っている。さらに、右側の坂道は「大まけ道」で、春木座、中村座などの劇場が転がり落ちていく。画面右下には「もふけ滝」があり、板元と作者が滝に打たれ、「信心の利益でどふか此絵を千百枚も売れ舛やうに」などと願掛けしているところが面白い。本図刊行の前年にあたる明治十七年は、松方デフレの深刻化と農村の凶作が重なり、社会不安が増大していたという<sup>(14)</sup>。物価下落によって損得する者を、世直神社へ巡礼する者によって風刺しているのである。

同年に出された「泰平海世直競漕」(福田保画、大判三枚続)も、多くの商品や職業を善玉悪玉のキャラクターで表わしている<sup>15)</sup>。競合する商品や、対立する職業がボートレースでどちらが優位かを競っており、例えば日本傘とこうもり傘、日本酒と西洋酒などという日本の物と舶来品とが対立している。また、舶来品とは無関係の鰻飯と泥鰌汁、男女湯と温泉などもある。鉄道馬車と便利蒸気のように外来物の間で競争が生じているのは、明治初期の新旧対立が描かれた図式と異なるといえる。画面中央の二艘の大きな船は、三菱汽船と共同運輸会社の旗を掲げている。これは両社によって繰り広げられていた海運競争が、本作が出された年に合併し新会社を設立して幕を閉じたことに関連する。後ろの屋形船には、華族、銀行、異人などが「われらの道中は安泰<sup>あんたい</sup>／＼」と皆が競争する様子を眺めていたり、左奥の岸では金物などが「われらは競争<sup>きやうそう</sup>相手もないやうだ」と言っている。

巷間事件を書いた錦絵新聞に悪玉が描かれた作品もある。「浪花之嵐実録噺」(三代広重画、明治七年か、大判二枚続)は、添えられた文章によると、明治三年に起きた心中事件を描いている<sup>16)</sup>。画中では、悪玉が悪女と共に男を誘っている。

明治時代の浮世絵は、善悪の行動をわかりやすく示すために、善玉悪玉が共に描かれている。また、風刺画では多くの職業や商品を善玉悪玉のキャラクターを用いて表現している。江戸時代の浮世絵と比べると、善玉悪玉は着衣の者が多くを占め、洋装の者がいることも明治期の特徴である。これは明治五年に出された「東京違式誑違条例」の第二二条で「裸体又ハ袒裼シ、或ハ股脛ヲ露ハシ醜体ヲナス者」<sup>17)</sup>が風俗統制の対象とされたように、西洋の思想の影響を受けて裸で外に出ることが処罰の対象になったことによるだろう。昇斎一景は錦絵「画解五十余箇条」(明治六年か)で「東京違式誑違条例」を絵解きするシリーズを出しており、禪姿

で湯屋から出たために警官に棒で叩かれそうになっている男を描いている<sup>(18)</sup>。

## 第二章 おもちゃ絵

### (一) 双六

おもちゃ絵とは、子どもが遊ぶおもちゃとして描かれた浮世絵版画のことである。

双六に描かれた例は、江戸時代後期にも見られたが、明治に入ってから、国家意識の高まりに伴って、善い行いと悪い行いを示すための教育的効果をはっきりと狙って善玉悪玉が用いられた。

「泰平開化繰雙録」(河鍋曉斎画、明治七年)は、小学校入学から始まる文明開化時の出世を描いた三十マスを巡る双六である<sup>(19)</sup>。画面下の小学校入学を振り出しに、右半分は学業を身につけて官吏となり出世する道で、左半分は朝寝、大酒などの墮落した生活をする道だが、最後には改心というマスがあり、上がれる仕組みになっている。この改心のマスは、善玉が三方に改心と書かれた玉を乗せて、男に授けている様子で、悪玉二人がその場から逃げ出している。双六の右半分には善玉の姿は無いが、左半分の墮落した生活のマスには所々に悪玉が配される。また振り出しには悪玉が鬼の姿で描かれている。本作の袋絵には、狩衣姿の善玉が「泰平開化繰雙録」と書かれた札を掲げている。娘は鳥の形の凧を揚げているが、その糸の糸巻は洋装の悪玉が持っている。

「善悪振分雙六」(歌川房種画、明治期か)は、子どもが元服するまでの行いを善悪で示した二十六マスから成る双六である<sup>(20)</sup>。手習い、肩揉みなどで善のマスを進んでいくと、褒美や婚礼となり上がりとなるが、向

島や意見などのマスを進むと密通、女郎買などに身を落としてしまう。善玉は善い行いを見守っているが、悪玉は時に悪事に加担しており、善玉悪玉が共に描かれることで画面が賑やかになっている。善玉は水色の長袖に赤い褌、悪玉は赤い長袖に水色の褌を締めている。

「勸善懲悪貧福鑑」(二代長谷川貞信画、明治二十四年)も、小学校入学から始まり、善悪の行いを辿りながら出世していく道を描いた双六である<sup>20)</sup>。三十三マスの内十二マスに善玉か悪玉が人物と共に描かれており、例えば登楼のマスには、悪玉二人が誘っている様子が描かれている。徴兵のマスに善と書かれていることは、明治という時代を表わしているだろう。

「教育善悪子供双六」(画工未詳、明治二十九年)は、画面を八等分した中に、子供の生活の様子を十九の場面を描いている<sup>21)</sup>。振り出しから上がりまで二十コマをめぐる双六である。右下の「愛児」と書かれたマスが振り出して、左上の正月遊びの場面が描かれているのが上がりとなっている。右下から左下の順に上がりまでは「愛児、犬けしかけ、手習、灸治、楽書、おしかり、孝行、朝おき、らんかんわたり、賞状、勉強、あんまいじめ、木のぼり、おもり、いねむり、人だまし、美術、さいほう、なまけもの」のコマがある。例えば「朝起き、賞状」のように子供たちの行為の善いものには善玉、「らんかんわたり」のように悪いものには悪玉が共に描かれている。各コマには教訓的な文章が添えられており、例えば朝起きには「この子のやうに朝早く起き、働かねばなりません」という文章が書かれていることから、子どもに善悪を教える意味合いがあったと考えられる。善玉悪玉は、赤い長袖に股引姿で、肌の露出は少なくなっている。

善悪の行動以外を描く双六の例としては、「三段目清元浄瑠璃双六」(歌川房種画、明治八年)がある<sup>22)</sup>。清元の浄瑠璃を題材とした中に、悪玉が歌舞伎の衣装を着て描かれているマスがあり「そのあくゑんがはくゑ

んに」と言葉が添えられている。悪玉踊りがなされる歌舞伎「三社祭」は、清元の舞踊である。

明治期の双六は、善悪の行いを描いたものに加え、官吏の道への出世を描くものが出てきた。善玉悪玉の本來持っていた善い行い、悪い行いという意味から、明治政府や社会が求める官吏という善の道、その反対は怠惰な悪の道という意味合いで用いられるようになった。個人の教訓を説いた江戸時代後期の双六に比べ、明治時代の双六は、徴兵を善とするなど、国家的な視点を持った教育道具となっている。

## (二) かるた絵・物語こま絵

『浮世絵大事典』（東京堂出版、二〇〇八年）によると、おもちゃ絵の一種であるかるた絵は、切り抜いてかるたなどを作るための絵のことで、物語こま絵とは、画面が柀目状に分割され、その中におとぎ話などの絵が描かれており、切り抜き組み立てると豆本に仕上がる絵をいう。どちらに属するのか判別しづらい作品もあるのだが、ここでは双六以外のおもちゃ絵の例を取り上げる。

「しん板猫の善悪」（画工未詳、明治十三年）は、縦横それぞれ四等分にされた十六マスから成るかるた絵の一種で、擬人化された猫と善玉悪玉が描かれている<sup>(24)</sup>。マスの右上には「善」「悪」とそれぞれ書かれており、上の二段が善、下二段が悪で、右上から左下に向かって話が展開していく。善は親孝行して親切心を持って過ごししていると、善い縁に恵まれて婚礼となり、子どもが生まれてお宮参りする場面までが描かれている。一方悪の道楽息子は、親不孝で浮気者のために、夫婦喧嘩をして飲み潰れ、最終的には落ちぶれて宿無しになってしまうという話になっている。善玉は出会った二人の赤い糸を結び、悪玉は夫婦喧嘩している二人の赤い糸を切るなどの役割を果たしている。

同じく猫が擬人化された例には「新版猫之善玉悪玉」(小宮山昇平画、明治期)があり、十六マスに区切られているが、横二マスごとに一つの絵柄になっている点が異なる<sup>(26)</sup>。右側が善、左側が悪で、上から下へ見ていくと、善には母親の肩を揉む孝行娘が、ある日三味線を弾いていると見初められ、最後は婚礼の様子で結んでいる。一方悪は、親不孝な息子が船遊山や夫婦喧嘩をした挙句、酒に溺れて着物を売る様子が描かれている。猫の周りで囃し立てる善玉悪玉の服装は、どちらも赤い長袖を着て、善玉は水色の股引、悪玉は紫色の股引を穿いている。

「しん板猫の善悪」(長谷川墨吉画、明治十九年)は、画面を八マスに分けて上から下に善と悪が交互に描かれている<sup>(26)</sup>。擬人化された猫の善悪の行動を描いているが、本作の特徴は善玉悪玉に耳が付いて猫の姿となっているところで、善玉は直衣姿、悪玉は赤い禪姿で描かれている。

人の行動を描いたおもちゃ絵の例も見てみよう。「教訓善悪くらべ」(画工板元未詳、明治九年)は、十六のマスに分けられたかるた絵で、上二段に善玉がつき、下二段に悪玉がついている<sup>(27)</sup>。勉強、運動、親孝行という子どもの行動や、教師、役人、官員という職業についた者を善としている。一方で、子どもの不勉強、いたづら、親不孝、くず拾いが悪とされ、泥棒、捕縛、懲役なども描かれている。各マスには文章が一言添えられており、例えば教師のマスには「勉強して教師となる」、いたづらには「学校へもゆかずいたづら子供」と書かれていることから、かるたとして遊ばれたことが考えられる。

「子供教訓善悪遊び」(歌川国利画か、明治期)も、十六のマスに分けられたかるた絵で、子どもの遊びや生活の様子に善玉悪玉が共に描かれている<sup>(28)</sup>。善悪を交互に配置し、勉強やそろばん、運動、犬をかわいがる子には直衣姿の善玉がついている。一方蟬採りや賽銭泥棒、犬をいじめる子には悪玉がつき、悪玉も共にいた

ずらをしてている。

かるた絵では、善悪の行為を示すために善玉悪玉が用いられた。各マスに善玉悪玉を描き入れることで、切り離しても善と悪のどちらであるかが明確になる。子どもの遊び道具では、善悪を教える教材のようにして使われたのだろう。

### 第三章 本の表紙や挿絵

浮世絵やおもちゃ絵には、善悪の行動を示した作が多く描かれていたが、善悪を教える教訓本も出された。『教訓善悪鏡』（牧野惣治郎編・出版、歌川国利画、明治十七年一月刊）は、様々な身分や職業の者がとる善悪の行動を善玉悪玉と共に交互に描いている。二十四丁から成り、善悪の行動が描かれた二十四図にはそれぞれタイトルが付され、登場人物や善玉悪玉の台詞が書き込まれている。先に挙げた月岡芳年の「教訓善悪図解」とは類似する主題や図像が見られることから、参考にした浮世絵が存在し、本の体裁に合わせて作られた可能性もある<sup>(29)</sup>。例えば、「心堅固な親父」（十七ウ十八オ）と「心得違な親父」（十八ウ十九オ）は芳年の作品とタイトルも一致し、前者は親父と息子と娘が料理を囲む様子で、後者は娘と一緒に寝ろと言って親父が引き留めるといふ構図が類似している<sup>(30)</sup>。多くの善玉悪玉が描き込まれており、善玉は直衣姿、悪玉は禪姿である。大阪の清玉堂から再板された際には、東京、長野、新潟でも出版された<sup>(31)</sup>。

仮名垣魯文や坪内逍遙は挿絵や扉絵に善玉悪玉を用いた。坪内逍遙の『当世書生氣質』（明治十八—十九年刊）の表紙絵には善玉悪玉のキャラクターが描かれた（図8）<sup>(32)</sup>。顔の文字は善悪ではなく、「一読三歎」と書

かかれているが、『心学早染草』の善玉悪玉の趣向を用いていることは明らかである。関良一氏は、東京堂版の神代種亮校の『当世書生気質』の解題に「山東京伝の善玉悪玉を模して一読三歎の四字を配したるは作者の案にして、下絵を書きたりと記憶す」という逍遙の直話があることを指摘し、角書にこめられた作者自身の自讃・自負を思いやるべきだと述べている<sup>33)</sup>。逍遙は多くの黄表紙を所有していたことも知られており、善玉悪玉のことを自身の作で用いたのは『心学早染草』の世界を気に入っていたからかもしれない。

仮名垣魯文作の『河童相伝 胡瓜遣』（河鍋晩斎画、明治五年刊）の挿絵では、「一心の地球円転て善悪の線脰にひかれ両道に傾く図」と書かれた通り、善玉と悪玉が地上の人間を引き合っている様子が描かれている（図9）。絵の脇には「京伝以来の古物をひきだして、開化の世界へ用ゆるとはあぶねへもんだ、しかし古きをたづねた新作かしらん」と書かれ、善玉悪玉は京伝の作ったものとだと、作者や画工は認知していたことがわかる。また、「善悪の二つの玉はチト古風だが西洋服だけ新し」というところから、既に明治に入ってから、善玉悪玉は古くさい題材となっていたことが窺える。江戸の戯作を想起させる善玉悪玉だが、本来の裸に禪姿ではなく、洋装の姿で描くことで明治という時代の新しさを加えている。



図8『当世書生気質』表紙  
国立国会図書館所蔵

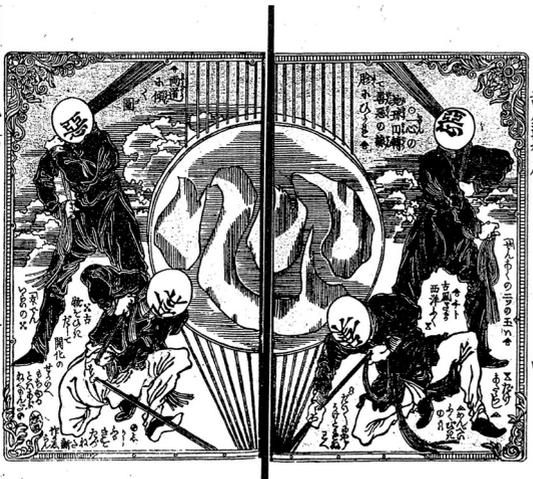


図9『河童相伝 胡瓜遣』初編上之巻 序 4丁裏5丁表  
国立国会図書館所蔵



図10『太郎兵衛水掛論』4丁裏5丁表  
早稲田大学図書館所蔵

決は、死刑となったものの、無期刑へと減刑されたもの、あげられ、芝居、戯作絵草紙、講談となり好評を博したという<sup>35)</sup>。見返し絵で善玉が悪玉を倒すところを描くことによって、勧善懲悪を表現している。

万亭応賀作の『太郎兵衛水掛論』(晩斎画、明治七年刊)の四ウ五オの挿絵には、顔に「学」と書かれた善玉悪玉のキャラクターが、中国風の装いの初老を縄で縛っている(図10)。も一人は、長い棒で天狗の鼻を折っている様子が描かれている。自国の学問を疎かにして、外国の学問を重視する傾向に対し、外国天狗の鼻を折って警鐘を唱えているのだという<sup>34)</sup>。応賀は弘化元年(一八四四)刊の滑稽本『教訓浮世眼鏡』でも、善玉悪玉のキャラクターを用いていた。

『相州奇談 真土廻月置之松蔭』(伊東市太郎編、中嶋亨齊画、明治十三年刊)の見返しには、善玉が悪玉を踏みつける様子が描かれている。これは、明治十一年に神奈川県真土村で起きた七名殺死と被殺者の家屋全焼という真土村事件に取材した内容である。阿部安成氏によると、真土村事件はすぐに複数の新聞で連日報道され、被害者は悪辣な地主であったために、殺人放火犯には多くの同情が集まり、人々の興味を引いた。裁判の判決は、死刑となったものの、無期刑へと減刑された。事件はこうした大団円を結末とする勧善懲悪譚にまとめられる。阿部安成氏によると、真土村事件はすぐに複数の新聞で連日報道され、被害者は悪辣な地主であったために、殺人放火犯には多くの同情が集まり、人々の興味を引いた。裁判の判決は、死刑となったものの、無期刑へと減刑された。事件はこうした大団円を結末とする勧善懲悪譚にまとめられる。



図11 『労働世界』第82号  
挿絵

明治時代後期には、新聞挿絵に善玉悪玉のキャラクターが見られる。『労働社会』（第六九号、明治三十四年一月一日）には、顔に「期成」と書かれた直衣姿のキャラクターが雲の向こうから太陽の如く出ており、それを海の岩場で労働者が眺めているという挿絵が描かれている<sup>36</sup>。また、第六九号から七四号（同年三月十五日）の新聞タイトルの部分には、直衣姿の「期」と洋装の「成」が描き込まれている。『労働世界』は期成会鉄鋼組合の機関として生まれしており、「期成」を挿絵やタイトルに用いることで読者に労働運動を意識させているのだろう。

『労働世界』（第八二号、明治三十四年六月二十一日）の挿絵「上がるものと下がるもの」は、日清戦争後の物価変動を風刺している（図11）。楼閣を舞台に、安泰な「官吏」と「輸入」商が一番高いところで見晴らしを楽しんでおり、「物価」は階段を大股で上がっている。一方「商」人と「労働」者は階段の中腹あたりを下り、さらにその下には、「賃金」がいる。階段を転げ落ちている「銀行」は、支払い停止騒ぎが頻発していたことを表している<sup>37</sup>。高いところに安泰な者たちがおり、景気に左右されている商売を階段の昇り降りて描くところが、一章で挙げた「世直山物価降図」と類似している。

明治期に本の表紙や挿絵で用いられた善玉悪玉は、本の内容が善と悪を示している場面で主に用いられた。江戸後期に流行した、少々古くさいモチーフというイメージも含まれていたようだ。また幕末の風刺画のように、物価高を風刺する絵にも使われた。

### おわりに

明治期の特徴を改めてまとめておきたい。

浮世絵では、同じ職業や身分の者を善と悪に描き分けるといふ作品が多く出された。善い行いを見守る役が善玉、悪い行いを唆し囃し立てるのが悪玉となっている。また善玉悪玉は子ども向けのおもちゃ絵にも描かれた。浮世絵やかなるた絵には、親孝行をして正直で親切に暮らしていると良縁に恵まれ、幸せな家庭を築くという教訓的内容が多く見られた。画中に善玉と悪玉を配置することで、善悪をよりわかりやすく示しているのである。行動の善悪を善玉悪玉と共に示しているという点では天保期の教訓絵本などと共通するが、江戸時代のように個人の行動に視点が置かれているというよりも、社会や国家の視点から見た善悪となっている。この違いは、国を強くするという明治政府の教育方針が背景にあるように思う。それは双六で良い人生とされていたのが、よく学び官吏の道を目指すことだとしていることから窺える。江戸時代は、あくまでも個人を対象とした教えであったのに対し、明治時代は国家のための教育となった。それは善玉悪玉を描く姿勢にもつながり、天保期は検閲から免れるという意識で善玉悪玉を用いていたのに対し、明治に入るとより積極的な教導のために使用されたのである。

浮世絵や新聞挿絵に見られた風刺画では、顔に品物や職業名を書いて用いられた。多くの品物や職業を示すのに簡素な画像の善玉悪玉のキャラクターは好都合である。挿絵では、善悪を強調するとともに、一昔前に流行したキャラクターというイメージも少なからずあったのだろう。

また、善玉悪玉の着衣姿が増える背景には、明治初期に西洋の思想が入ったことで、裸で外に出ることが取り締まられ、社会通念が変化していったことが関係している。

## 付記

本稿をなすにあたり、図版掲載のご許可を賜りました各所蔵機関に深く御礼申し上げます。

## 注

- (1) 拙稿、「『心学早染草』善玉悪玉の影響―寛政から文化・文政まで―」（『学習院大学国語国文学会誌』五八号、二〇一五年三月）及び「『心学早染草』善玉悪玉の影響―天保から幕末まで―」（『学習院大学人文科学論集』二三号、二〇一四年十月）。
- (2) 『日本の漫画三〇〇年展解説図録』（川崎市市民ミュージアム、一九九六年）三四頁解説に拠る。図版は「昇斎一景―明治初期東京を描く」（町田市立博物館、一九九三年）六四―六七頁参照。町田市立博物館の作品は折本となっているが、浮世絵を上下に切って折本の体裁に仕立てたか、もしくは折本として売り出されたことも考えられる。
- (3) 注(2)に同じ。図版は前掲注(2)書『昇斎一景―明治初期東京を描く』七二―七五頁。
- (4) 図版は、前掲注(2)書『昇斎一景―明治初期東京を描く』二四―二五頁参照。

- (5) 前掲注(2)書『昇齋一景―明治初期東京を描く』(六二―六三頁)には、折本の体裁で、二合、三合、六合、七合、八合、九合、一升が収められている作品が掲載されている。
- (6) 図版は前掲注(2)書『昇齋一景―明治初期東京を描く』六八―七一頁参照。折本の体裁だが、それぞれ一から十の数字が振られていることから、元は二丁掛の浮世絵であった可能性が高いと思われる。
- (7) 岩切友里子編著『芳年』(平凡社、二〇一四年)所収「芳年錦絵作品一覽」二八〇頁に、二十作品四十図のタイトルが記されており、管見の限りではこの他に「正直ナ車夫/悪弊ナ車曳」(フィラデルフィア美術館蔵)がある。
- (8) 吉田漱、千頭泰「楊洲周延・錦絵目録(二)」(『季刊浮世絵』四四号、一九七二年二月)を参考にした。
- (9) 図版は『浮世絵版画 図録編』(第二部、たばこと塩の博物館、二〇一一年)三四一頁参照。
- (10) 図版は国立歴史民俗博物館ホームページ館蔵資料データベース「子どもの善悪」(資料番号H230133)参照。
- (11) 古河街角美術館他編『没後一〇〇年記念 河鍋曉齋展―美しき女々』(古河市古河市教育委員会、一九九九年)六六頁解説参照。本図録には、同じ主題で悪玉が描かれていない「伊蘇善物語之内 獅子の恋慕の話」も掲載されている。
- (12) 『暁斎の戯画・狂画』(東京新聞、一九九六年)二九六頁解説を参照した。
- (13) 図版は東京都立中央図書館TOKYOアーカイブホームページ「応需暁齋楽画」[第十号](請求記号E239C31-10)参照。解説は、前掲注(12)書、三〇〇頁を参考にした。
- (14) 『資料館叢書別巻―明治開化期の錦絵』(東京大学出版会、一九八九年)一一七頁。
- (15) 図版は、前掲注(14)書、一〇二頁、及び清水勲『明治漫画館』(日本図書センター、二〇一三年)参照。絵の解釈もこれを参考にした。
- (16) 図版は国立歴史民俗博物館ホームページ館蔵資料データベース「浪花之風実録噺」(資料番号H231360)参照。
- (17) 小木新造他校注『日本近代思想大系二三 風俗 性』(岩波書店、一九九〇年)八一―九頁。
- (18) 図版は、前掲注(17)書、三二二頁参照。
- (19) 図版は、前掲注(11)書、五八一―五九頁、河鍋暁齋記念美術館編『河鍋暁齋と門人たち 日光をめぐる画家―真野暁亭を中心に』(小杉放菴記念日光美術館、二〇〇一年)二八頁参照。

- (20) 図版はポストン美術館ホームページ「Board Game of Distinguishing Good Versus Bad Behavior (Zen'aku furiwake sugoroku)」(Accession Number:1.391771.2) 参照。
- (21) 図版は『絵すゝろくー遊びの中あこがれ』(東京都江戸東京博物館、一九九八年) 六八頁参照。
- (22) 図版は、加藤康子・松村倫子編著『幕末明治の絵双六』(国書刊行会、二〇〇二年) 二二七頁参照。解説に画  
中文字の翻刻もなされている。
- なお、国文学研究資料館の近代書誌近代画像データベースに、『教訓善悪鏡』(神戸大学附属図書館住田文庫所蔵、請求記号7B27) という折本が掲載されており、これは本双六の一マスを見開き一ページに仕立てたものである。子ども  
の行為が書かれた四角い説明書きはあるが、双六の指示書きや上りの文字などは消されている。
- (23) 『古典籍展観大入札会目録』(東京古典会、二〇一三年十一月) を参考にした。
- (24) 図版はポストン美術館ホームページ「Newly Published Good and Evil Influences Enacted by Cats (Shimpan  
neko no zen'aku)」(Accession Number:1.44658) 参照。
- (25) 図版は『幕末明治の浮世絵 青木コレクションによる』(千葉市美術館、二〇〇五年) 一〇九頁参照。なお、  
同じ図柄の作品がたばこ塩の博物館に所蔵されており(前掲注(9) 書「猫の世界 善玉悪玉」三三五頁)、  
こちらには「明治十八年」と書かれていることから、この年に出されたことも考えられる。
- (26) 図版は前掲注(25) 書、一〇八頁参照。画中の台詞の翻刻もなされている。
- (27) 図版は静岡県立中央図書館デジタルライブラリーホームページ「教訓善悪くらべ」(上村翁旧蔵浮世絵集四二、  
請求記号K915-108-042052) 参照。
- (28) 図版は東京学芸大学リポジトリ附属図書館所蔵資料ホームページ「子供教訓善悪遊び」(請求記号159/KUN)  
参照。
- (29) 以下二十四図のタイトルである。参考として、芳年画「教訓善悪図解」の類似する主題タイトルを○内に記  
す。「学文を勉強する児／悪習小供」(善教ノ小児／悪習ナ子供)「孝行娘／親不孝な娘」(孝行な処女／不孝の  
娘)「夫を能守る女房／密通する嫁」(夫に能仕ふ女房／夫に逆ふ女房)「業を勉む芸妓／懶惰な芸妓」(能業を勉  
む芸妓／浮気な芸妓)「能はたらく家婢／朝寝の好きな家婢」(主人に能勤る下婢／主人を悪評する下婢)「主人思ひ  
の小僧／悪習小僧」(主人の教へを守る丁稚／主人の教へを守らざる丁稚)「裁縫を能覚る小娘／おてんば娘」(該



The Influence of “Good Spirit and Evil Spirit” by “Shingakuhayasomegusa”

—Meiji Period—

SEKIHARA, Aya

The terms good spirit (*zendama*) and evil spirit (*akudama*), which are the characteristic features of *kihyoshi*, are still used today. For example, good germ and bad cholesterol. Santo Kyoden’s *kihyoshi* “Shingakuhayasomegusa” was published in 1790 and it is known as the best seller of Kyoden. The protagonist’s heart of the “good spirit and evil spirit”, which had been personified, is represented by means of imprinting the letters of good and bad on a round face and describing a man with a loincloth and naked to the waist as a distinctive character. After the publication of “Shingakuhayasomegusa”, Kyoden’s concept of “good spirit and evil spirit” were adapted by vernacular prose, *ukiyo-e*, and the Kabuki theatre.

This paper is to collect works drawing the “good spirit and evil spirit” which were made under the influence of “Shingakuhayasomegusa” and review their features by each period. It covers Meiji period (1868-1912).

In *ukiyo-e* which were drawn one’s good or bad behaviors the “good spirit and evil spirit” were used a lot. In *omochae* (toy pictures for children) the “good spirit and evil spirit” were used to teach children both good and bad. They were used more active education than in the Edo period. In the Meiji period, same as the end of the Edo period the “good spirit and evil spirit” were used in caricature as useful signs to personify things by putting names of things on faces.

One of the features in the Meiji period the “good spirit and evil spirit” were described wearing clothes, which was for prohibiting people from going outside without clothes. This was done under law.

